
ウラギリ

莉央沙

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ウラギリ

【Nコード】

N2472F

【作者名】

莉央沙

【あらすじ】

バケモノ、そう呼ばれる二人の子供のお話。

化物（前書き）

主人公が大分危険人物なので、血とか（若干）です。苦手な人は、
気をつけて下さい。

化物

寂しい荒地を、真つ白な死に装束を着た少年が裸足で歩いていた。その足取りはフラフラしてい

て、危なげだった。そのうちに大きな岩に背中を預けて座り込んでしまふ。そのまま、少しも動かない。

風が吹いた。少年の短い黒髪と地面の乾いた砂とをもてあそんで過ぎていく。同じ事が何度も繰り返されているうちに、遠くに人影が見た。先程からまったく動かない少年と同じくらいの背丈の人物。しかしその他の顔立ちや性別がまったく分からない。何故なら頭からつま先までを隠す様に白い布を被っていた。分かるのは、楽しそうに笑う口元だけ。

「あ、夜見いた・・・。」

その声から女の子らしいという事が分かった。もう一つ岩に背を預けている少年の名前が夜見と言うらしい事も。

白い布を被った女の子は、夜見のすぐ近くまでよりしばらく見下ろしていた。そしておもむろにしゃがんで左手を夜見の首に回して抱きついた。

しゃがむ時に、澄んだ高い音が響いた。

「何だ、生きてんじゃん・・・。」

しばらく抱きついてたかと思うとそう言つて離れた。

「ちつ、つまんなあゝい」

女の子らしくない舌打ちをする。

「朱赤あ今舌打ちしましたね？私が生きてちゃ都合悪かったですか？」

まったく動かなかつた夜見がいつの間にか姿勢を変えて座っている。近くで見る夜見は色が白く整った顔立ちをしていた。何よりも目を引くのは、銀色の瞳。本当にソレでモノが見えているのか疑いたくなる様な色。

「あ、おはよう！脱獄犯！！もちろん生きてほしかったよ。朱赤の2番目に大事な人だし！！」

女の子、朱赤は早口で言う。それから首を傾げる。

「でもなんで朱赤だつて分かったの？ちゃんと顔隠して来たのに。匂い？オーラ？」

真剣に悩んだふうの朱赤を見て夜見は苦笑いをする。

「普段から顔隠してる奴が何やってんの？それに死に装束着た怪しい人間の生死を確かめるのにわざわざ首筋に耳当てて脈をはかる様な変な奴、朱赤だけでしょくに」

それに、と言つて朱赤が被っていた布を引っ張る。その姿を見て夜見はにっと笑つた。

「音がしたから」

被っていた白い布を取つた朱赤の顔は、それでも半分が不明だつた。何故なら顔の右側だけ前髪を伸ばしていて、伺う事が出来ない。はつきり見える左目は、紅茶の様な紅。

それを除けば夜見の目の前にいる朱赤は、何処にでもいる様な普通の顔。醜いわけでは無いが、夜見の様に特別美しい分けでもない。

「相変わらず平均的な顔してんな。男の私のほうが綺麗なぐらいだ」

「あはは、夜見ひどあい。・・・立場わきまえろよこの野郎。お前殺す時は絶対顔潰してやるからな」

「朱赤に私は殺せないよ。その前に私が朱赤の首もいでやるから」子供の会話とは思えない言葉が飛び交う。それでも、2人にはまるで日常会話の様に聞こえるのか、あつさり流してそれで終わり。お互いになにっこり笑つて元の喋り方に戻る。

「ところで、朱赤はなんでまたそんなもんくつつけて来たわけ？」

夜見の視線を追えば、朱赤の左手、今まで隠されていて機がつかなかったが、

「よく役人に捕まらなかったな」

5本全ての指に、爪の様に金具で固定された5本の剣。朱赤が動くとなんか触れ合つて高い音を響かせる。

「捕まったケド。そんなもんは袖の下で何とでもなるよ!!」

「金で解決って、人間としてどうなんですか？」

夜見の苦笑いに、ケラケラと朱赤が笑い転げる。

「人間としてどう?とかよく言えるね!夜見も朱赤も人間として認知されてないのに!あはは、おつかしいのお」

そうだね、と夜見も笑う。

「トコロデ、脱獄犯の夜見。よく逃げれたね!!」

まだ可笑しそうに笑いながら朱赤が言う。

「はあ、アレねアレはどう考えても濡れ衣だろうに。私がそんなことしたら今朱赤は居ないよ?」

「そうだね!!えっと何て罪状だったけ!？」

「全部覚えて無いけど『王の娘を殺した』的なこと」

「あはは、ホントだ!それじゃあ朱赤は夜見に殺されてるね!!おもしろおい」

かつてに死んだ事にされている朱赤はそれでも笑う。この2人の子供は何処かが大きくずれている。周りと何かが違う……。

「朱赤ほここまで何しに来たの?」

思い出した様に夜見が問う。

「うん。夜見の首を取りに来たんだよ!!」

「ふゝん。朱赤が?私の首を?そりゃ頑張れ」

最初にふらふら歩いていたのが嘘のように夜見はしっかりと足取りで立ち上がる。

「うん。頑張る!!でもその前にやんなきゃいけない事があるよ?気づいてるでしょ?」

にっと笑って夜見は頷く。そして辺りに厳しい視線を投げかける。

「朱赤はねえ、自分だけで良いって言ったのに、後からこっそりついて来たの」

「うわ、ウザイね。数は?」

「200位?だと思う」

朱赤の返事を聞き終わる前に夜見は動いていた。

いつからいたのか、大勢の武装した男たちがいた。その一人の、自分よりもずっと高い位置にある顔をつかんで地面に叩きつけていた。そんな動作をした後でも夜見は平然として次の標的に向かう。

「朱赤！200って言ったっけ？競争しよう！ただし殺しちゃったの数えちゃダメ！」

「いいよお。あつ腕取れちゃった。数えて良い？」

朱赤もいつの間にか、離れた場所にいた。指についた五本剣を抜きながら大人の腕、しかも肘から先だけを夜見の方に振っている。

「ダメ！」

夜見の返事は短かった。

何分もしないうちに、その場に立って居るのは2人の子供だけになった。

「夜見何人？」

周りの状況を気にせず、明るい声で朱赤が聞く。

「100。私は頭いいからちゃんと手加減できるんです」

「違うう！夜見が頭いいんじゃない！朱赤刃物しか扱えないだけだもん！！」

ボロボロと朱赤が泣きはじめる。紅の目から流れる涙は透明で、何だか期待はずれだった。

「負けてないもん、ホントは、殺し合いなら、朱赤の圧勝だ、もん・・・」

グスグスとまだ嗚咽をついている朱赤の顔をまじまじと、不思議そうに夜見が覗く。

「何？」

ちよつと腹を立てた声が返ってくる。

「いや、朱赤両方の目から涙出てるから、『目玉が入って無くても』涙が出るのかナアって」

泣き止んで、半分だけ見える顔が笑う。

「それは噂だよ」

「だって実際に顔隠してるから・・・」

そんなことよりつと、朱赤が真顔になつて言う。

「もう子供見たいな演技する必要無いし、本題に移りましょうか。
朱赤もここへ来た目的を果たさないとだし」

この国の王様は、程々に有能で普通の人間と同じくらいに愚かで、
権力を持った人物らしくある程度の欲があつて、国民に不満を言わ
れない位には国を治めることができる人物でした。その王に一人目
の子供が生まれました。用事が有、他所の国に行っている時でした。
それでも、すぐにお城へ帰ろうとしました。その帰り道に、男の子
を拾いました。自分の子供が生まれた日だから、何かの縁だ、そう
いう思いが有りました。拾った子供は、色白で銀色の目をしていま
した。全体的に色素の薄い子でした。お城に着いて、その子を人に
任せ自分の子供を見に行きました。部屋の戸を開けようとした時に、
自分の妻の悲鳴が聞こえました。慌てて駆け込むと、彼女は何かを
叫んでいました。赤ん坊の方を見れば、紅色の目をしていました。
片方の目に深々とナイフが刺さっていました。当の本人は泣きもせ
ず、狂った様に何かを叫ぶ自分の母親を面白そうに眺めていました。
色々な事に疲れて、その部屋を出た所で拾った子供の面倒を任せた
女中に会いました。彼女は泣きながらこの仕事をやめさせて欲しい、
そう言いました。理由を聞けば、子供に腕の骨を折られた。そう言
いました。この厄介な2人のことは朱赤と夜見と名づけられた。

気づいたら、自分は『夜見』と呼ばれていた。まあ裏では化物とか
言われてるが。

めったに生まれないが アルビノ とかゆうもともと色素の薄い生
物らしい。目の色が薄い分太陽みたいな強い明かりがあると、良く
目が見えない。

なぜ自分がお城に住んでいて勝手にブラブラ出歩いても怒られない
のか聞いてみた事がある。

（話かけたらめっちゃくちやな顔されたが）

なんでも、王が拾ってきたらしい。それと、多分自分のせいでも有ると思う。暇があれば、暴れまわって物を壊したり。大人と喧嘩してすっかり殺っちゃたり。（でも捕まったことはない。多分捕まえられないと思っているのかも）

周りは自分みたいなガキ一人を恐れているらしい。ほんとに意味わかない。

ある日、お城の周りを無意味にブラブラしていたら屋根の上から話しかけてくる変な女がいた。女と言つての自分と同じ歳くらいの子供。

「ちょっとそこ行く綺麗なおにーちゃん！包丁投げられたく無かったら何か甘い物よこせー！」

昼間で良くは見えなかったけど、顔の右半分だけを隠しているのは分かった。

「あんた誰？ぼく、じゃなくて私のこと知らないの？」

「知ってるよ！ヨミでしょ？字は知らないけど。シュカは朱赤だよ」

下のほうからこっちを見上げてるヨミは眩しそうに目を細めている。（ひよつとして夜しか良く見えないから『夜見』？うわ、くだらねえ）

「ああ、よるちゃん遊ぼうよお！」

奴の噂は結構よく耳にする。きつと自分と同類だ。

「よるちゃんとか、喧嘩うってんの？」

周りの大人なんかより頭が良くて、（自分でも頭良いと思うし）普通の人間と考え方がずれていて、どちかつーと動物っぽい気がする。

「違うよ！喧嘩うってないよ！見下してんの！！」

そう言ったら無言で、小石を拾って投げてきた。顔直撃は（たいした顔じゃ無くて）ヤダから、厨房からこつそり拝借した包丁を顔の前に出した。結構丈夫なはずのそれが、（牛とか豚とか骨ごと切っているのを目撃した）金属が、小石一つで碎けた。

「夜見すつごい！馬鹿力！！朱赤夜見のこと好き〜！」

屋根から飛び降りて、夜見の隣に着地する。

「改めて、こんにちは！一応お姫様の朱赤です。好きな食べ物のは砂糖です！趣味は刃物いじる事とお金その物は好きじゃないけど、お金を使って人をいじるのが好きです！」

夜見が年相応の子供っぽい笑顔を浮かべた。

「朱赤〜起きてください。朝ですよ」

朱赤の世話をする人は誰もいないらしい。（一応オヒメサマなのに）誰も関わろうとしないから、何時までたっても起きて来ない。寝ただけ眠っている。

最初に出会ったのは、5歳位の時。（はっきり言って、自分が何歳か分からない）朱赤と同じ年という事になっているから、13歳になる今まで私が朱赤を毎朝起こすが、なかなか起きない。

ふと、前髪で隠れている顔をが気になって見てやろうかと手を伸ばしたら、

「・・・・・・・・！！」

親指の付け根辺りに噛み付かれた。腕を上げてもそのまま頭まで上がってします。しかも噛み付いている本人は眠っている。

「朱赤！起きて下い！起きろ！！」

いい加減血がたれてきた。そのころやっと朱赤がおきる。上半身を起こしても、寝ぼけているのかまだ手を離さない。

「まずい・・・・。鉄分？」

開口一番がそれ。顔面殴ってやりたくなった。

「お前！人間としてのプライドが無いのか！！歯を使うな歯を！！」
噛まれたのはもう気にならないが、自分の言った事が可笑しかった。人間？私も朱赤も違うね・・・。

王に、お父さんに呼び出された。

「夜見を捕らえる。お前をしんだ事にする」
自分は頷く。

絶対に、捕まらない。始末出来ない夜見を消すには、自分が殺されたことにならないと。

「夜見が逃げたら朱赤、お前が後追って始末して来い」

夜見に怪しまれず近づけて、夜見と同じ位に強いのはこの国に自分だけ。

王は私を道具だと思った。

私も、こんな愚かな王の言う事など聞いてやらない。
でも彼は父親なのだ。

それに、私を、夜見を所詮子供だとなめてかかっている。
それでいい。そのほうが面白い。

「分かりました。貴方様の命ならお受けします」

私はにっこり微笑んで、
嘘の笑顔で

深く礼をする。
これからを想像してニヤケル顔を隠

すために

私が考えることは夜見ものってくる。

楽しみだね……。

まさか自分が捕まるとは思ってもいなかった。

（しかもまったく見に覚えの無い罪で……。）

私は知らない間に朱赤を殺した事になっていた。

まあどうせ化物を始末する為にどこかのアホが考えたことだろう。

朱赤の遊びならそうとうウケル。

問題は、これからだ。

王族に危害を加えれば例外なく死罪。

面白そうだ。

地位とお金で色々やって、夜見の処刑を無理やり夜に移した。
夜でないと不都合が出る。

本当は昼には自分は消えているはずだったのに、何故か夜まで命が長引いた。

どうせ朱赤が何かしたのだろう。私への『遊ぼう』という誘いか。

辺りは真っ暗なのに、窓の下に見える広い中庭は相当に明るい。私にはよく見える。

たくさん火を燃やしていた。

私は窓枠に頬杖をついて夜見を待つ。

いくら国民に知られたくないからって、まさか城の中で罪人の首を落とそうとするとは……。

死に装束を着せられながら、あきれ返っていた。

中庭に連れられて来て見れば、沢山の火でよく見えない。

そろそろ待ちくたびれた頃に夜見が出てきた。

眩しい光から目を逸らし夜の空を見上げる。朱赤が窓から見ていた。

目が合った　お互いに微笑んで……

朱赤の口が動く。明るいことは違って、暗い部屋に居る朱赤の口は声を発しなくても何を言っているのかよく分かる。

『その辺の兵を蹴散らして。国境ギリギリまで走って。朱赤も行くね』

そう伝えて、私は部屋を出る。夜見もあっさりと逃げているだろう。

朱赤は蹴散らせったがそんなことする必要は無かった。ちょっと動いたら周りの人間の方が驚いて身を引いた。

だがすぐに状況を把握して寄ってくるのがいたが、一人殴り飛ばしたらみんな逃げ出した。

戦うのは好きだが今は少しでも朱赤より先に進みたかったので追わずに走った。

殴った奴の首が235度くらい回った気がしたが、まあいいか。

「夜見は足が速いからなあ」

ついつい独り言を言ってしまった。

城のいたるところかっぱらって来た刃物を並べながら迷っていた。

刃物は好きだが持ち歩くのは重くて困る。あんまりジャラジャラ持つていくと動きにくい。

迷った末に一番のお気に入りを持っていくことにした。

動くと、刃と刃がぶつかって澄んだ音がする。

ああ、顔を隠さなくては。一部の人間を除いて皆私は死んでると思っっているのだから。

流石に、丸一日走るのはきつかった。まったく朱赤はな二をしているのか。

もうここで休んでしまおう。そう思って岩の陰に背中を預けて座る。いいや。寝よう。どうせ朱赤が見つけたら起こされるだろうし。

しばらくしたら、近くで金属質の澄んだ音が聞こえた。そうして誰かが自分に抱きついた。

・・・朱赤が来たか。

この贅沢で美しい部屋に居るのは、王と、数十人の兵と、2人の子供の死体。

朱赤と夜見の・・・。

夜見の顔には、銀色の瞳を壊すように朱赤の五本の剣が後ろ頭まで貫通していた。

もう、顔の区別はつかない。

朱赤の方を見れば、在り得ない事だが夜見の手が首を突き抜けていた。

片方だけの紅い瞳と口に血の流れた後があつた。

部屋の空気は重く、息が詰まつた。

「本当に、朱赤と夜見か？」

重い空気など気にせずこの国の王は口を開いた。

「確かめました・・・」

兵の一人が、消え入りそうな声で報告する。朱赤の様な紅い瞳の人間はいない。朱赤のような化物を殺せるのは同じ化物の夜見しかない。

「そうか。ここまで上手く行くとは」

王は満足そうに言う。

この計画は夜見を朱赤に消させる事ではなく、化物同士殺しあつてもらい2人ともに消えてもらうものだった。万が一どちらかが生き残つても無傷とはいかない。そこを止めを刺すために、200も兵をつけた。

「どんなに頭がよくても、化物などと呼ばれていても所詮は子供。やはり馬鹿だったか」

「お父さん。誰が馬鹿だつて？」

居ないはずの人間の声が聞こえた。

一瞬、死体が口を利いたかと思つて振り向いた。

そこには相変わらず2人の子供がピクリとも動かず置かれていた。

空耳か・・・

視線を前に戻す。

「!？」

確かに、後ろで死んでいるはずの朱赤がにっこり笑つて立っていた。ただし、右目を隠すことなく長い前髪は左と同じように耳にかけられていた。

右目は噂どつりに眼球は無く、小さな丸い闇があつた。

「お父さん、誰が・・・馬鹿だつて？」

笑顔が消え、敵意をむき出した大人のような顔をした。

その瞬間首筋に小さな冷たい、子供の手のひらが当たった気がした。すぐにそれは強い力になって足が床から浮く。

「私もお聞きしたいです誰が馬鹿なのか・・・？」

軽やかな夜見の声。

とても自分より背の高い大人を片手で持ち上げている者の口調ではない。

部屋にいたはずの兵がいつの間にかバラバラにされていた。

「ほらね！そうでしょ夜見！！朱赤の方が強いんだよ！」

「違うね。一勝一敗だよ。引き分け」

確かに、動いて喋っていた。

朱赤と夜見は語る。馬鹿で愚かな王に、

楽しそうに・・・

200の兵を気絶させ、（正確に言えば半分はもう起きないだろう。朱赤のせいだ）

2人の子供が表情を和ませて話す。

「ホントに私を殺すつもりで来たのではないでしょ、朱赤？」

「当たり前じゃん。あんなの監視してる人間がいたから言っておいたの」

考えは？と言う夜見に朱赤は笑う。

「同じこと考えてるでしょお？」

2人の脇に、いつの間にか同い年くらいの子供がいて礼をとる。

「雇ったの。大変だったんだからね！夜見に似てるの探すの！！やつはお金は大事だね！！」

確かに、夜見と朱赤に何となく似ている。ただし、本物の様に変わった目の色ではないが・・・。

一瞬のことだった。朱赤は夜見の偽者の顔に五本の剣を突き立てて

いた。夜見の手が朱赤の偽者の首を貫通した・・・。

合図をしたわけでは無いのに、それがほとんど同時に起こった。自分たちの身代わりに、着ていた服を着せ代わりに身代わりの服を着る。

夜見は手を抜いて、自分の偽者の、もう動かない手を朱赤のそっくりさんの首に開いた穴に通す。

朱赤は剣を抜かずに、手に固定されている金具を外してもう一人の自分につけた。

「それ、一番のお気に入りなのに・・・」
残念そうに呟く。

「そんな事よりいいのか？私のほうは顔潰れてるけど、朱赤の偽者の目、黒いよ？」

朱赤はにつこりして顔を夜見に近づけた。

「顔、右半分みたい？」

そう言つて右の前髪を耳にかける。夜見は息をのんだ。

「両目あるじゃん・・・」

おもむろに、朱赤は偽者の目をくりぬく。そして、自分の右目をあつさりと取った。

「・・・！？」

さすがの夜見も驚いた。

「これ、義眼なの」

朱赤は言つてソレを偽者の左目に入れた。紅い義眼を・・・。

「これで、完璧」

『あははは！』

2人の子供は、呆氣にとられた顔の大人を見て嬉しそうに笑う。

「私たちが、ここまでやるとは考えなかったでしょ？馬鹿はあんただよ」

「朱赤が本気でお父さんこと慕っているとも思ってた？そんなの

ぜえんぶ嘘だよ！その方が面白かったからね！！誰が自分より馬鹿な奴言うこと聞くかよ！」

いったい何時からこうなる事を予期して、演技をし続けたのだろう？この子供たちは、いや子供なんかではない。

「化物め・・・」

思わずそう声が漏れた。

夜見と朱赤はお互いに顔を見合わせて、満面の笑みで

『バケモノで結構』

そう言った。

言った瞬間に、夜見に捕まれていた首が鈍い音を立てて折れた。そのまま地面に投げ出される。

朱赤が、どこから出したのか大きな包丁を持っていた。ソレが・・・肩口に刺さり床と完全に繋ぎとめられる。

「サヨウナラ。馬鹿で愚かな王様！城ごと燃やしてつてやるから」火を放って2人の化物は楽しそうに、笑って去っていった・・・。

「あゝああ。国ごと燃えちゃったね」

国のすみからすみまで見渡せる丘の上。

夜だというのに、辺りは炎で明るい。

朱赤の弾んだ声に、目を細めて夜見は振り返る。

「ああ」

気の無い返事をよこす。

眩しすぎる・・・

そう、表情に出ている。

「具合、悪いの・・・？」

あまりにも人間らしい問いに、夜見は目を見開く。

「あはは、ひっかかったあ」

夜見はケラケラ笑う。朱赤を子づく。

うんと手加減をして・・・。

笑うのをやめて、囁く様に言った。

「気をつけてね、化物はすぐ裏切るよ・・・」

優しい声が返ってくる。

「大丈夫。ヒトが私たちを化物と呼ぶ限り、同族にウラギリはないよ」

化物（後書き）

誤字・脱字等有りませんでしたでしたでしょうか？
読みにくいわ、何が言いたいのかわからないわ、で申し訳ございません。

こんな危険人物の2人の話は続きが有ったりします。。

（一応、ファンタジーに分類しましたが違ったらゴメンナサイ）

― 赤い子（前書き）

朱赤の小さいころの話です。
時代がさかのぼっています。

―赤い子

ふう、

と一つため息をつく。

（緊張のしすぎだ）

自覚はしているが、緊張しないでいられる訳がない。

（これは、とっても運のいい事なんだ）

城に勤め初めて一ヶ月で、こんな大きなお仕事をもらえたんだ。本当に、運がよかったのだ。

彼女は何度も頷く。

今までは、本当にちよつとした雑用だけだったのだ。そんな彼女が任されたのは「お姫様のお世話」自分より何年も前から勤めている人が、皿を洗ったり掃除をしているのに！

最初は、妬みごとを言われと思っていたのに、何故か周りは複雑そうな視線を寄越してくるだけなのだ。

（ひよつとして、我儘なお方なのかな・・・？）

確か姫は、朱赤様は今三歳になったばかりだと思ったのだが。

朱赤様が生まれた時に王妃様が発狂した、とかで今は行方を知っている者がいないらしい。

（やつぱりお母様がいないと、性格捻くれちゃうのかなあ）

ぼやぼや考え事をしているうちに、朱赤様が居ると聞いた庭園の入り口に來ていた。

「朱赤様・・・？」

その幼い女の子は庭園の一番すみの花壇に居た。

花壇には秋の花が枯れかけていた。周りの木も葉を落とし始めている。そんな中に小さな子が一人で居るのは、なお更に寒々しい。

「だれ？」

朱赤が顔を上げ小首を傾げる。その顔を正面から見て、彼女は息を

呑む。

やっと喋り始めたくらいの子どもの声は静かに冷たい。

それ以上に、驚くのは紅い瞳。

黒い髪は肩に掛かる程まで伸び、前髪は目にかかるギリギリ。顔の右半分は包帯で巻かれていた。

（皆のあの顔はコレのせい・・・？）

見た目なんか、関係ない。そう自分に言い聞かせる。

「あ、あの新しく朱赤様のお世話をさせて頂くことになった者です」
無理にも少女に微笑んで見せた。

「ふうん」

その声には子供らしさを感じない。

「・・・。ああ、ほらまだ蝶が飛んでいますよ」

次になんと声をかけていいか迷っていると、枯れかけた花の中を大きな美しい蝶が飛んでいたので、とっさそう言った。

くると、朱赤が蝶の方を見て追いかけて花壇の中に入って行く。

（なんだ、やつぱり子供じゃない）

そう思っ、彼女は目を細める。

ちょこちょこと蝶の後追う朱赤に、どこか安心していた。

その安心も、すぐに壊れて消えた。

蝶を捕まえた子供は、グシャリ、グシャリとその蝶を握り潰す。

「朱赤様！そんな事をしたら、可哀想でしょ？」

「なんで？」

無感情な問いが帰ってきて、逆に戸惑ってしまう。

「何でって、こんな寒い中一生懸命に生きているのですよ」

「じゃあ、そっあのほうがかわいそうだよ」

どういう事だ。意味が分からずに眉をひそめる。

「あのね、」

と、子供に物を教えるような、呆れたような笑い顔で朱赤が話す。

「いつしょうけんめい、いきてどうなるの。もうはなもかれて、たべるものもなくなつて、羽をやすめることもできないでしぬまでとびつづけるの。ヒトいがいのいきものはジサツできないんだよ。ならいま、しゅかがころしておいたほうがぜんぜんかわいそうじゃないでしょ?」

微笑む少女の手からはらはらと蝶の残骸が零れていく。

反論できなかった。

ただ、目の前の子供が怖いと思った。

三歳の、舌足らずの口でそんな事を語る子供が・・・

その考えかたが・・・

紅い瞳が・・・

「ヒトはばかだね」

彼女の考えている事を見抜いたように、朱赤が嘲笑う。

その言葉で彼女は走り出した。

一刻も早く、この生き物から離れたい。そう思っていた。

(明日にでも辞表をだそう)

走りながら考えていた。

そして分かった。

どうしてこんな自分に大きな仕事が回ってきたのか、周りの視線の意味・・・

(アレは人間の子供じゃない)
そう確信した。

― 赤い子（後書き）

読んで頂有難う御座います。

2人の妙な子を、周りから見たらどんなふうに見えるのかなあと、書いてみました。

わかり辛い話です・・・。

― 白い子（前書き）

赤い子の、夜見バージョンです。

―白い子

―やっぱり、僕は要らないの？

雪の多い国の、小さな町で男の子が生まれた。
色白の、ととのった顔立ちの子。

銀の瞳。

両親はとつてもとつても可愛がりました。

その男の子にはお兄ちゃんが居ました。お兄ちゃんもとつても、とつても可愛がりました。

その子はとつてもとつても幸せでした。

一歳になった時です。

その男の子は、病気になりました。お父さんもお母さんも仕事がありましたから、出掛けなくてわいけまんせんでした。お兄ちゃんも、仕事の手伝いをしに行くので一人で家に居なくていけませんでした。寂しくて、寂しくて、頭を撫でて出かけようとしたお兄ちゃんの手を掴みました。

これが、一番最初にこの子の運命を変えた出来事でした。

―まって、置いて居ないで

そう言いたかったけれども、彼はまだ喋れなかった。だから頭を撫でてくれている大好きな兄の手を掴んだのだ。

その瞬間に、兄の笑顔が歪む。

パキリ。

妙な音に手を離すと、引きつった笑顔のまま手を振って出かけていってしまいました。

二歳になった時。

男の子は、優しい良い子でした。

ただ、まだよく力加減が分からないのかよく物を壊してしまっていました。

ある日猫をお父さんが買ってきてくれました。その子は動物が大好きで、ぎゅーと可愛い猫を抱きしめました。

両親も兄もその微笑ましい光景に目を細めました。

が、猫が急に暴れ出した。そのうちにぐたつと猫の体が後ろに仰け反る。

驚いたように目を見開いて両親や兄の顔を見返した。

三歳になったとき、お兄ちゃん以外誰もそのこに触れようとしなかった。一歳の子が人の指を碎いて、二歳の子が猫をへし折って・・・。

可愛がっていた両親も、さすがに怖がった。

兄だけは困ったように笑って前と変わらず接していた。

「もう、　　が怖いの」

お母さんの声。

「　　を捨てるしかない。上の子だって骨折したの何回目だ・・・」
お父さん。

「止めてよ。僕は大丈夫だから!!」

お兄ちゃん。

最後までそう言ってくれたのは兄だった。

だが結局、置き去りにされてしまったのだ。

―僕だってどうしたらいいか、分かんないんだ・・・

とつても泣きたかった。

誰かに拾われた。

とても豪華な部屋にいた。

拾ってくれた人とは違う女の人が世話をしてくれた。

「着替えをもつて来ますからね」

そう言つて、部屋を出て行こうとした。

また一人になつてしまふのが怖くて

―待つて

手を掴んだ、

―ああ、またやつてしまった・・・

「・・・」

折れた腕と僕とを見比べて、

「・・・化物」

押しつぶされた、悲鳴じみた声を出してその人はいつてしまった。

僕はまた一人になった。

『夜見』になる前の名前は覚えていない。

昔の記憶に有るのは自分は「ヒトと違うナニカ」でなくてはいけな
いという考えと。一つの思い。何で小さかった自分がそう思ったか
は覚えていない。ただその考えた結果の言葉だけ覚えてる。

―みんながそう言つなら、僕は化物になるよ。

そう呼んだ人たちへの仕返し。

赤＋白 1（前書き）

朱赤と夜見、国をぶっ壊してから二年後の話。
過去話から現在形です。

赤＋白 1

雪の多い国。

それなりに綺麗な宿屋。

その食堂。

男は困りきりながらも、表面で笑っていた。

—ほんとに、どうしよう・・・

窓際の席で朝食を取っている。目の前に座っているのは昨日あったばかりの色白の青年。髪は黒。瞳は銀に服は黒一色。うっかりしていると、首だけが浮いている様に見えてしまう。昨日お金が足りなく相部屋を頼んだ青年だった。

—ただの噂だと思っていたもんだからなあ・・・。

この男がこんなにも困って居るのは、もちろん理由がある。

男の歳は三十を少し過ぎたばかり。職業は物売り。毎年冬になると大きな山を挟んだ隣の国に商品を背負って売りいく。

その山が、とても高いせいか山一つだけでこちら側の国と向こうの国で天候が全く違う。出来る作物も全く違う。だから畑を使えなくなる冬に物を売りに行く。『この時期に珍しい』と良く売れる訳なのだが・・・

「あの国は、二年位前に全部燃え尽きたぞ」

そう同業者に言われた。

数年間、都合がイロイロあって行けなかったのでどんな具合だと聞いた答えがこれだ。

まさか。

そう言って笑ったのだ。

そしていつもどおりに山を越えた。
本当だった。

家も城も、王族も全部燃えていた。

火は最初、城から上がったらしい。自然に起きた火や、事故ではない不自然な出火だったと、

それを見て国民は逃げ出したのだそう聞いた。

本当に何も無くなっていた。

コレでは商売にならない。持ってきた荷物を全て背負って戻ってきたのだが……

家に帰るまでの宿代もない。

この商売は、結構儲かるので帰りを心配した事が全く無かったのだ。

で、今同じ席について朝食をとっているやたら顔立ちのいい青年と相部屋にして貰ったのだ。彼もそんなにお金がないようで、『良かった』そう笑った。

だが男は全く良くなかった。

相部屋にすれば半額で泊れるのだが、半額分もないのだ。

それをどうし様か悩んでいた。

——いっそ踏み倒そうか、ああダメダメ俺そんなことする程度胸なし！でもそれしか……

泥沼にはまりかけた時に、店の戸がいきよい良く開く。他の客もそちらを向く。

中に入って来たのは小柄な人影。子供か女性かの。ただ頭から布をすっぽり被っていてどちらかは分からない。

つかつかと、店の主人が座っている前まで歩きぴたりと足を止めた。

「この宿屋の売り上げ、全部だして」

女の声だった。

しかも幼さの残るあどけない声。店の主人はその声に大笑いする。

「馬鹿な事をおいいでないよ、お嬢さん」
どす。

つと鈍い音がした。赤い飛沫が舞う。

「出せって言っただでしょ？」

一拍置いての悲鳴。

床に転がった店の主の首にはぶっすり和小刀。

「騒がないで下さいな。命が惜しければ所持金と砂糖が含まれているお菓子を下さい」

「え、何コレ？押し入り！？え、砂糖菓子！！！？

「この——！」

ガタイの良い客が小柄な押し入りを取り押さえようと飛び掛る。

次の瞬間に倒れたのは飛び掛った客。眉間に銀のフォーク。小柄な押し入りの手には今度は鉈。

「はあ、シユカのコレクションあんまり減らさないで欲しいんですけどお」

もう誰も取り押さえようとはしない。所持金をだしていく。

「俺無いのにどうしょー！！お菓子もない！！

あたふたしていたらくるとこつちを振り返る。

心臓が口から出るかと思った。だが、俺を見ているわけではない。

（目が見えないからどこ見てるかは定かじゃないけど・・・）

俺の向かいの青年。

横目で見れば呆れたような笑みを浮かべている。

「なにか？」

可愛い声には明らかに棘が含まれている。

「いや、子供じみた物を要求するなと思って。可笑しくて」

くすつと笑う。

「馬鹿にしてる??」

「いや、別に。微笑ましいものだと思っただけ」

聞いているほうが心臓に悪い。

「ちよつと、外でもらえる？」

押し入りが青年の手を鉈を持っていないで引つ張る。

「私も中で暴れるより外の方がいいと思いますよ」

2人連れ立って出て行く。

店の中にはまだ緊張が残っていた。

赤＋白 1（後書き）

『化物』は一ページに全部入れちゃって、何か嫌だったので今度は小分けにしてみようと思います。。

赤＋白 2

誰も動こうとしない。

2人が出て行った店の中は静まりかえっていた。しかも相当に空気が重い。

―何コレ。外出ちゃいけない雰囲気？

男も動けずにいたが、周りの未だにビクビクしている人たちに比べたら大分落ち着いている。

―……。ああもういいや！

ガバツと立ったら周りの視線が痛い。気にならないふりをして外に出る。

戸を閉めた瞬間に中から立ち上がるような音が連続して聞こえた。

―っんやっぱりこっいゆのは最初の一人が肝心？

男は大きな荷物を背負って雪の中を歩く。

ずぼ。ずぼ。

足を踏み出すたびに、同じ音が返ってくるので何だか急かされているような気分になる。

―ん？

前方からも雪を踏む音が近づいてくる。よくよく目を凝らせば15、16の髪の毛の長い少女。一人っきりで向かってくる。しばらく足を止めて此方に歩いてくる人影を眺めていた。ら、

「わっ」

突然少女が消えた。

―え！？なに？？！！

慌てて背の荷物を降ろしてそちらへ駆けていくと、雪が積もって平らに見えていたのだろ。大きがさして深くも無い穴があいていて、などと言いながらさっきの少女が落ちていた。

「大丈夫ですかあ？」

ん。と言って上を見上げる少女の顔には上半分目を隠すようにして包帯が巻かれていた。

「えっと、おっこちやいました」助けてください」

穴の中に降りて行くとよいしょっと、と掛け声をかけて立ち上がったしつかりと男の方を見る。

「目、見えてるんですか？」

不思議に思ってたずねてみれば、可愛らしい幼い声が返ってくる。

「怪我、って言うんですかね。でも音が来る方向とか跳ね返り、あと風の流れとかで分かるの」でも、地面の穴はきずかなかったなあ」その声に聞き覚えがある様な気がした。

「いくら、自信があっても目が見えないのに雪道を一人で歩くのは危ないよ」

「でも急ぎだから」

背中に背負われながらそう言う。男が背負ってきた荷物に比べたら軽い。

穴から少女を負ぶって出てくる。

「えっと、名前は？急ぎでも人と一緒の方がいいよ」

「朱赤だよ。ええ、でもそんな暇も無いほど急いでるし……。そう、急いでるの！どうもありがとう御座いましたあ」

そう言っただけだと雪の上を走っていく。所々生えた木も器用に避けて。

赤＋白 3

無傷で宿屋から出れたことと、宿泊費を払わないですんだ事になんて運がいいのだろうと浮かれていてすっかり忘れていたが、どこまでも真つ白な雪景色と冷たい風ですっかり頭が冷えて思い出した。

―あの人大丈夫だったかな！？

あの銀の瞳の青年。

名前は、聞いてなかった気がする。

今更に思い出した自分が情けない気がした。

―自分が助かったことばかり喜んで、忘れてた！ど、どうしよう・・・。

どうしよう。そんな事を考えていても足は前に進むことしか出来ない。

男は足を止めた。

背筋が凍るのが自分でも分かる。

360。どちらを見回しても白い世界。

そこに鮮やかに映えるのは、美しすぎる朱の色。

所どころに生えた木は、茶色に枯れていてその木々に刺さるのは大小の銀の刃物。

人形のように足を投げ出して木にもたれて座っている。

ただでさえ、人形じみた美しい白い顔は、血の気を失って更に白く。静かに目を閉じている。

目に痛いほどの赤は右腕の大きな傷口から、今も体温を伴って逃げ出していく。

その他にも小さな傷がちらほらと、

何も出来ないで立ち尽くす。

声をかける事も、

助け起こす事も、

ただただ、立ち尽くす事だけ。

静かに、雪が降り始めた。

雪の多い国住みながら、初めて雪の積もって行く音を男は始めて聞いた気がした。

其れほどまでに、静かなのだ。

静けさを打ち破ったのは男自身。

大またに青年に駆け寄る。今まで歩いてきた時よりも雪を踏む音が大きく聞こえた。

揺すり起こそうか、そう思っ止める。

これだけの出血なのだ。動かさない方がいい。

でも、こんなに寒いのに眠ったままだ大丈夫なのだろうか？

そこであることに気づいた。

青年にかけられた白い布と女物の上着。これ以上体温が逃げていこうとするの止めようとするかのように。

赤＋白 完

その白い布に、何気なく手を伸ばした。

見たかとのある色だ。

そう思った。

赤い血がだいぶ染み込んでいたが、見覚えがある。

「こら!!」

バシリ。

甲高い、女の子の怒鳴り声。

伸ばした手を払われた。

「ヨミに触っちゃだめ!!! いじったら、腕もげちゃうかもでしょっ」

「君・・・」

「あれ? その声さっきのひと?」

「えっと、朱赤ちゃん・・・?」

随分、足の速い・・・

最初にそう思った。朱赤の両目は今も先程会ったとうりに包帯が巻かれていた。目は見えていない筈なのに何故こんなに早く移動出来るのだろう。

「そうだ、この人朱赤ちゃんの知り合いなの!？」

思い出したように、早口で言う。

「うん。朱赤のおにいさんみたいな人だよ」

まただ、男はそう思う。

何度目だろ。今日、見た事がある。聞いたことが有ると思うのは。

「ちよつとした喧嘩、だよ」

朱赤のクスクスという笑い声。

(喧嘩・・・?)

この青年は押し入りと出て行っただけ。

「ヨミが、子供っぽいなんて言うんだもん」

周りに散らばる銀の刃物。

「……」

男は、ヨミという青年に駆け寄ったままの姿勢で朱赤を凝視する。

「ヨミ起きて」

顔を近づけて囁く。

男は、ただ見ているだけ。

青年が薄っすら目を開く。

「朱……か？」

「おはよお」一個前まで戻ってみたけどお包帯無かったあ！つか、

ヨミが『朱赤が持つてるとまた大量にお菓子買い込むから』とか言
つてお金没収するからかえなかった」

くす、と木にもたれたヨミが笑う。

「自業自得」

「ヨミの怪我も自業自得う」

この状況で笑える異常さに、男は気づく。

「でもまあ、朱赤もやり過ぎたと思うから、これあげる」

しゅるりしゅるりと、目の包帯を外してゆく。

現れたのは隻眼の瞳。

色は紅。

周りに散る朱よりも美しい赤。

とった包帯を、青年の大きくえぐれた右腕に巻く。

男はただ目を見開いて見つめるだけ。

朱赤は回りに散らばる刃物を一本ずつ集めはじめる。

薄目を開けたまま、ゆっくり瞬く青年にかけられていた上着と白い

血染めの布を被る。

その姿は

左手で、青年の腕を引いて立たせる。

その光景は

「シュカのコレクションあんまり減らさないでよね」

その言葉は、

「悪かった。お菓子買ってあげますよ」

朱赤の肩に縋りながら青年は笑った。

2つの人影は白い雪の中を歩いて行く。

男は夢でも見ていたのかと思う。

アノ青年と朱赤と言う少女。

本当に人間だろうか。

（夢、だったのかもしれない・・・）

あんな、ただの喧嘩だといって辺りを朱で染め、腕を落としかけた方が軽く笑って謝る。

そんなヒトがいる分けない

男は荷物を背負いなおして歩く。

辺りの赤色は気にしない。

それについて考えるのは、

恐ろしい事だ。

アカイ人

ああ、もうこれで終わりだ。

夜見の胸に刺さったのは、美しい装飾を施された小振りのナイフ。
その小ささからは考えられないほどあっさりと言を砕いて心臓に突
き刺さる。
刺したのは、

「朱赤……」

最期に見た顔は、泣いていた。

（朱赤は、気づいていないのだね）

その事が、何だか悲しい気がした。
きっと死に顔は困った様な笑い顔だろう。
自分でそう思う。

朱赤と何年か、ブラブラと気ままに生きた。
適当にその辺で寝て。

金や、食べ物に適当な場所から盗って来て。
時々いさかいを起したりして。

国を出てから何年目かした時に、すっかり右腕を切り落とされかけ

たりして。

何か目的がある訳でもなく、ただ好き勝手に生きた。

ある日の事。

朱赤が言った。

「夜見はちゃんとヒトだと思っの」

朱赤の国を潰してから、何年目の事だろう。

あんなに、普通顔とからかっていた朱赤も大人になってだいぶ美人になっていた。

その事を、さり気なく褒めてみた時の事。

――朱赤も、随分綺麗になった。

最初、朱赤は笑った。

そしてその笑顔は次第に薄れ、冷たい声で言ったのだ。

――夜見はちゃんとヒトだと思っの

ああ、

とその時思った。

朱赤が私をヒトだと思っなら……。

小さい頃に言った『同類にウラギリはないよ』

私たちは、もう同類ではない。

小さなナイフは驚くほど鋭くて、簡単に体の中に入り込んで来た。
朱赤の顔を見たときに、涙が流れているのに気がつく。

――朱赤も十分ヒトだと思うよ。

私が朱赤と同類ではなくなると言うことは、私から朱赤へ対するウラギリ。

―バケモノは仲間が居なくなること、泣いたりしないのだよ。

朱赤もちゃんと人だよ。

その事に気づいていないというのが、哀れで悲しかった。

小さな町のいつもどりの朝。

の筈なのに、何やら外が騒がしい。

女は朝食を作る手を休めて、表に顔を出してみる。

外では近所の者たちが何かを取り囲む様にして集まっている。

「いったい、どうしたの？」

親しい者も顔を見つけ、その声をかけながら人の輪に地近寄る。

「見ないほうがいい・・・」

わりと付き合いのある家の旦那が、そう言った。

（もっと早く言ってくれば良いのに・・・）

女はそう思った。

輪の中心にあつたのは、20代くらいの若い男の死体。

明らかに死んでいると分かる。

左胸に刺された跡があつた。

その他にもちらほらと傷が見えるが、それはどれも古傷だろう。

ただ、その男の顔は困った様なそんな笑みを浮かべていた。

端正な顔立ちなのが、なお更に気味が悪い。

どう考えてもこれはこれは殺されたのだ。

（なんで、笑っているの・・・？）
そこに居た誰もがそう気味悪がったはずだ。

小さな町のある朝のこと。

朱赤は、きっと普通の子供だったのだ。

ただ、奇妙な色を持って生まれてしまった。

もし、そこが普通の家族のもとならば、

だが、悲しい事に朱赤が生まれたのは王家。

周りには大きな権力。

赤い奇妙な目は、その色だけで朱赤の立場をかえていく。

そして、朱赤は小さい頃から刃物を持って自分を護ろうとし

た。

大きな権力の中にあつて、朱赤は歪んでいったのだろう。

だからね、朱赤。私は貴女はちゃんと人なのだと思うよ。

シロイ人

「夜見……」

何度目かに呟いてみる。

随分前から地面を踏んでいる気がしない。

焦点が定まらない。

体が重い。

すぐに息が上がってしまう。

もう両目を覆う事はしない。前は音の跳ね返りや風の流れて何となく周りを把握できたのに、それが出来なくなった。

大量に持っていた刃物は、一つを除いて全部捨てた。もうあれだけの重しをつけては歩けない。

熱でもあるのか、唇がひび割れて血が滲む。

(……不味い)

滲んできた血を舐めてそう心で呟く。

「夜見……」

もう一度呼んでみたが状況は変わらない。

自分で殺したのだ。

夜見はちゃんとヒトなのだから、しかたの無い事だったのだ。

——「化物はすぐ裏切るよ」

自分が今いる場所が分からない。

地面は乾いていて、建物があるのは所々で、人が居る場所の方が少ない。後、沢山の焼け跡。

本当に何所なのだろう。

ただぼんやりと足を進めるだけなのだから、別に何所でも問題は無いのだが。

人の声が聞こえてきた。

ここは通りかなにかだろうか？

目隠ししていても目が霞んでよく見えない。

とりあえず、真っ直ぐ歩く。

足が縛れた。

転倒。

手足に力が入らない。

音がする。

（動物の、蹄の音？あと、車輪・・・かな）

起き上がれない。

大きくなる音。

大きな衝撃。

辺りから上がる悲鳴。

最期の言葉、

「夜見は、どこだろう・・・」

馬鹿な父親を始末してから、夜見と一緒にいた。

城に住んでいるときも一緒だったけれども。それ以上に長い時間を

一緒に居た。

わたしは、直ぐに気づく。

自分でも、わたしは賢くできているのを知っている。

だから、分かった。

夜見は、ヒトだ。

銀の瞳などたいした事は無いのだ。

ちゃんと、アルビノと言う生物なのだ。今までにだって数人だが、記録がある。

非常識なほど、力が強いのも加減を知らないだけだ。そして加減を覚える前に見捨てられただけなのだ。

わたしとは違う生き物なのだ。

それに様子を見ていれば分かる。
分かってしまったのだ。

夜見がヒトなら、もう要らない。

三年間一人で居た。

今まで夜見がかけていた歯止めが効かなくなって、
わたしは前より好き勝手に生きた。

食べることが面倒になって、何日も食事をしなかったり、眠くなつた場所でそのまま眠る。そこが大通りでも、深い森の中でも、そんなふうに生きていたせいかも知れない。

具合が悪くなった。

上手く歩けなくなった。

大量の刃物の重さに体が耐えられない。

モノを考えるのが鈍い。

自分で消したはずの夜見の名前を呼んで、探し回ることもあって自分に対して呆れた。

まるで寂しがっているみたいではないかと、

そして、最期の瞬間も夜見を呼んでしまった。

「これじゃ、まるで寂しがつている子供ではないか……」

この国は、10年前に全てが燃えた。

原因は不明。

だが、10年かけて国はだいぶもとに戻ってきた。

まあ、焼け跡のほうはまだ多いが、

それでも男はそれに満足していた。

それが自分の指揮の下に動いているのにもだ。

自分たちの国に帰って来たものはまだほんの少しだが、この男がその人たちをまとめ新しい家や、道を作るのを指示している。

今も、つい最近戻ってきたばかりの家族のために全員が協力して家を建てる作業をしている。

男はそれを少し離れた場所から腕を組んで見守っていた。

すると、家と家の間の細い道から人影が現れた。

女だと分かった。

（さて、あれは誰だったか……？）

見覚えの無い人物だった。

人影はフラフラした足取りで、道のあちらの端から男のいるこちらの端へ向おうとしていたが、

道の真ん中で足を縛れさせて転んだ。

起き上がる努力をしている様だが、なかなか立てる気配がない。

そろそろ助け起そうと男が足を踏み出した時に、

止まれそうも無いほど勢いのついた馬車。

人が戻って来てから、馬や馬車が度々通る様になっていたのだ。

その事を良い事だ。そう思っていた男はこの瞬間だけは、そうは思えなかった。

道に倒れていた女はひかれた。

それなのに馬車は止まらずに凄く速さで過ぎていく。

一拍置いてから、周りで作業していた者達が悲鳴をあげる。

数人が駆け寄り、数人が走り去った馬車の行方を探す。

男も慌てて女に駆け寄る。

「可哀想に・・・」

誰かがそう漏らした。

ここに集まった誰もがそう思う筈だ。

歳はまだ20代前後。

わりと美人の分類なのだが、その顔色は悪く、血で汚れていた。

目を強く閉じている。

病気でも患っていたのだろうか。動けなくなっていたところをひかれた・・・。

「だれか、この子をしっているかい？」

その場の全員が首を振った。

持ち物を調べてみたが、美しい装飾の小さなナイフが一本出てきただけで何所の誰なのか全く分からなかった。

考えた末に、城の焼け跡に埋葬しようという事になった。

ここにある墓地はもともと家族や親戚なんかの繋がりのあるものたちの墓ばかりで、身元の分からない人間の墓を作る場所が無かった。それに、あの大きな焼け跡を片付けるのは途方もなく時間が掛かる事だ。

ならばそれまでに土に返っているだろう。そんな考えもあった。

身元不明の女は城の跡地に埋葬された。

唯一持っていたナイフは墓標の替りにして、

男たちは軽く手を合わせた後、その場を後にして作業に戻った。

復興しようとしていたある国での出来事。

夜見はきつと優しい子供だったのだと思う

ただ、非常識な力を持って生まれてしまっただけ
もし、家族に見捨てられ無ければ、十分幸せに生きれたと思う
だが、夜見は捨てられてしまったのだ。

周りの大人たちは直ぐに夜見に関わろうとしなくなる。

夜見は人なのに、ヒトで居ることができない。

無理をして自分がおかしいのだと小さい頃から自身に言い聞
かせる。

そして夜見はそれを真実として受け入れてしまったのだ。

夜見、わたしは貴方がちゃんと人なのだと思うの。

あとがきと言つ名の雑談（前書き）

本編とはまったく関係ありません。

あとがきと言つ名の雑談

リ「こんにちは！リオサです！！何だか良くわからないし、誤字脱字も多いと思われるへボ小説を読んで頂ありがとうございます」

朱「自分でも意味が分からないと思うなら書かなきゃいいのにねえ」

夜「・・・・・・」

リ「はい。あとがきですので、朱赤&夜見君に地獄よりお越し頂きましたよあ」

夜「あんな扱いで死後も地獄ですか・・・・？」

リ「あんなだけやって置いて天国へ行くつもりで??（リオサがさせたのだけど）

じゃ早速、かるうく自己紹介してね。まず享年は？」

朱「23さいです」

夜「享年・・・不明。」

朱「夜見も23歳だよ」

夜「何で知ってるんだ・・・・？」

朱「だって、夜見私より3歳年上だよ。で、私より三年早く不慮の事故で・・・・（泣）」

夜「おい」

り「若干キャラ違おうが、気にしちやいけませんよ。」

夜「所で、いつまでこんなこと続ける気だ？」

り「……（泣）あ、あのね、これあんまり読んでくれる方が居なくてね……感想なんか来てたら君たちに伝えようと思っていたのね……」

朱「0なんだよね」

り「そう。だからもういつその事昔使っていたもつと少人数で小規模の掲示板的なところに投稿していた時の感想（と言うか、アドバイス・矛盾点の指摘）をここで言おうと思って」

夜「……。どうせ指摘ばかりだろ」

朱「じゃ一つ目ねえ、『朱赤が生まれた日に夜見が拾われてきたんですよね？』そして夜見は三歳で捨てられたんですよね？朱赤13歳の時身長同じ位って無理ありすぎなのでは？』だって」

り「うんとねえ、いいの。人間どこか欠点があるものなの。顔良くて背が高い奴なんか嫌いだ！」

朱「夜見嫌いなの？」

り「うん。朱赤に比べたら愛情薄い」

夜「私もお前に好かれても嬉しく無い。ところで、『化物の部分だ

けですが違うサイトで似た様な作品を見ましたが、盗作ですか？』
だそうだが……」

り「え、えつとね……」

夜「盗作か？」

り「……………」

夜「おい」

り「うつさい！！イロイロややこしいんだよ！君たちは最初絵だけのキャラだったんだよ！で、何となく小説つけてみたのお！そうしたら今よりヘボかったの！んで、捨てようとしたの。したら友達（琴子ちゃん、あなたです！）が『ええ、この子ら文章にしたらきつと綺麗だよ！お嫁に頂戴』で出した方がいいが、（初期設定上）化物まで書いた方がいいが、ことちゃんがそれ以上考え付かなくてサイトも閉鎖するしで出戻ってきたの！！『化物』部分と一緒に！」

夜「いい訳か？一番最初はお前が書いたんじゃないんだな？」

り「うん。そんな感じ？まあちよつと違うけど。君たち性格はちやめちやで、嫁入りさきで愛想尽かされちゃった……（りおさも使いづらと思う）」

朱「りおさが造ったんでしょ？」

り「ごめんなさい……………」

朱「まあまあ、でも次のもショック受けるかも。『ウラギリって題

があまり合っていない』」

り「その点もゴメンネ。嫁に出す前のへボい時のままなの。題名は」

夜「いい加減、内容に関するものを出せ。飽きてきた」

朱「じゃあね」『朱赤ちゃんは埋葬されましたが夜見君は??』ほんとうになったの?」

り「役人が回収しに来て、迷惑にならない辺りに放置され肉食獣がなんかに食われました」

夜「私に対する扱いが冷たくないか?」

り「次。」

夜「無視か!」

朱「『朱赤が最期まで捨てないで持っていたナイフに意味は有るのですか。有るならその辺もストーリーに入れてはどうです』」

り「朱赤ちゃんご自分で答えて」

朱「1、生まれて最初に右目に刺されたのです。2、夜見を殺す時使いました。それ以上の意味は有りません」

夜「薄いなあ、こんな物も有るぞ」『名前は漢字ですがここはこの設定ですか?服装についてなども細かく描写されていないので分かりません』」

り「異次元？名前は漢字しか思いつかないの。服装や建物はふるう
い感じの洋風をイメージして」

朱「アバウトだね」

り「あ、あとねえ、唯一質問？感想ばいの」『朱赤と夜見の関係は
？夜見クンは朱赤好きですよね！？』だつて」

夜「手のかかりすぎる妹……。まあす、好きだけど」

朱「おにいちちゃん。的な？あと玩具みたいなの？」

り「あ、これ最後。（ホント見てくれる人少なくて）『2人に実在
のモデル居ますか？』」

夜「こんな危ない奴居るのかよ……」

り「居ます。朱赤の方」

朱「へえどんな人？？」

夜（しかも朱赤のほう！？）

り「背え小さめの可愛い人。髪の毛真っ黒のストレートで色白。絵
描くのが上手くてえそれから武器マニア？」

夜「……（そこをモデルにしたんだな）」

朱「刃物好き！？」

り「銃とか。刃物は日本刀がすきだって」

夜「もう終らせろ！！！！（危険人物の話はいいから！）」

り「ネタも無しね。でもホント可愛い人だから！！」

夜「黙れ！」

わぁ、無意味なページ。

こんなトコまで読んでくださって方本当ありがとうございます。御座いました。書いてあるとおり、ネタも何もありません。

何か有りましたら、是非・・・・！！

感想なり突っこみなり、

それでは本当にありがとうございます。御座いました。

終わり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2472f/>

ウラギリ

2010年10月10日03時47分発行